

Benjamin C. Bradlee 著

A Good Life: Newspapering and Other Adventures

鈴木雄雅

昨年十二月、アメリカの著名コラムニスト、ジェームズ・レストンが亡くなった。言うまでもなく彼は、一九五〇年代からアメリカの政治、社会とともに歩いた偉大なジャーナリストである。その一年半ほど前にはニクソン元大統領もこの世を去っている。いま話題になっているのが、その彼をオリバー・ストーンが監督した映画『ニクソン』である。

本書はそのレストンと同時代のアメリカ社会を見てきたジャーナリスト、ベンジャミン・ブラッドリーの自伝である。D・ハルバースタムが「ブラッドリーの生涯には幸運がつきまといっている」と言うように、本書のタイトルも彼の助言で決まった。ブラッドリーを『ポスト』に引き抜くようグレアムに助言したのは、W・リップマンだ。

彼の名前がジャーナリズム界のみならず世界中に知れ渡ったのは、次の二つの

今日の同紙の名声の基礎が築かれていく時代だ。ブラッドリーには優れた人材発掘の能力があった。

最初は「三流のこそドロ」と評されたウォーターゲート事件も、ボブ・ウッドワードとカール・バインスタインという若い記者が活躍したこと、彼らの著書『大統領の陰謀』(All the President's Men)が映画化され、ダステイ・ Hoffman、ロバート・レッドフォードが主役を演じたことなどでもよく知られている(ちなみにブラッドリーの役は、ジェイソン・ロバーズが演じた)。ジャーナリズム・スクールに学ぶ誰もが、彼らを目指す時代をつくった。

何よりも、それは再選を果たした現職大統領を辞任に追い込んだ調査報道に注目される。ペンタゴンペーパー暴露事件に続くウォーターゲート事件は行政府の過ちを正し、新聞をはじめとしたマス・メディアの「権力の監視」機能の重要性を示した出来事である。ただ、残念なのは、あのとき「ディーブスロート」と呼ばれた重要な情報源は一体誰だったのか、

事件からであった。最初は、現職の大統領を辞任に追い込んだウォーターゲート事件(一九七二年)としてピューリッツァー賞を受賞したジャネット・クック記者の捏造事件「ジミーの世界」(一九八〇―八一年)のときである。いずれもレストンが活躍した「ニューヨーク・タイムズ」と双壁をなす高級紙『ワシントン・ポスト』の編集主幹として、その辣腕ぶりを発揮した。一九七一年のペンタゴンペーパー事件でも『ポスト』は、その主役を演じた『タイムズ』と同じ舞台で活躍した。これらの経緯はもちろん、本書の各章で触れられている。

ブラッドリー自身が書き下ろした作品である。せつかくだから、彼の経歴について触れておこう。それがアメリカ・ジャーナリズム、ジャーナリストの原点を教えてくれるからだ。第二次世界大戦終了直前、ハーバート大学を卒業したブラ

語られていない。

いざれにせよ、これにより米ジャーナリズム界最高の名譽であるピューリッツァー賞を受賞した『ポスト』紙はさらに評価を高め、同紙が『タイムズ』と並ぶ一流紙と称されるレベルに押しあげた。前年のペンタゴンペーパー報道で絶対の信頼関係が生まれたグレアムとブラッドリーの勝利でもあった。

そして、それから十年も経たないうちに、ブラッドリーらが築き上げた一流紙の信頼を揺るがす事件が起きようとは、誰も思わなかった。それはあつてはならないことであった。この時グレアム社主、ブラッドリー、そして社内オンブズマン、ビル(ウィリアム・グリーン)ら『ポスト』紙の対応、一万八千語に及ぶ報告は「この種の事件はひとつ起きても多すぎる」としながら、逆に同紙の対応の素早さ、的確さが称えられるという結果をもたらしたといわれる。ブラッドリーは確かに強運の持ち主だ。

ところが、七〇年代に敢然と権力に立ち向かった新聞の調査報道(Investigative

ッドリーは海軍に勤務したのち、マンチエスターで地方紙『ニュー・ハンブシャー・サンデー・ニュース』を始める。彼もまた他の新聞人と同様、高校生時代地元紙でコピーボーイとして働いた。同紙の株を売った一九四八年、市警・法廷担当記者として『ワシントン・ポスト』に入社、三年間、米大使館のプレス・アタッシェ(報道官)としてパリに駐在している。その後『ニューズウィーク』のヨーロッパ特派員に転じるが、ワシントンに戻ったあたりから、のち第三十五代大統領となるジョン・F・ケネディの隣人という知遇からか、多くの政治スクープをとり、ワシントンでその名が知られるようになった。

一九六一年『ポスト』が『ニューズウィーク』を買収した後、ブラッドリーは社主キャサリン・グレアムの信頼を得て、本紙に復帰。三年間の編集局長を経て、編集主幹になった。奇妙に思うかも知れないが、六〇年代までの『ポスト』はまだワシントンを地元とする一地方紙に過ぎなかった。それが優れた記者が集まり、

reporting)も、ともすると、「ジミーの世界」のように暴走する危険性を内在していた。他方、ポスト・ベトナムにおけるホワイトハウスのメディア操作はテレビを中心と巧みとなり、アメリカの政治、いや世界の政治がテレビ時代に突入し始めたことが、新聞ジャーナリズムに変容をもたらし始める。十八章「国益公対私」がそのあたりの苦悩を描写している。

八〇年代以降のアメリカ・ジャーナリズムは「民主主義の番犬」である新聞から「情報と娯楽」を提供する総合情報産業に変貌し、ますますジャーナリズム性を喪失しつつある。このレーゾン・デートルが失われることは、新聞自体が「時代遅れの恐竜」になることなのか。だとしたら、ブラッドリーが「素晴らしき、良き時代のジャーナリスト」といわれる日も、そう遠くはないかも知れない。

(すずき・ゆうが 上智大学教授)

Bradlee, B. C. - A Good Life: Newspapering

and other adventures. 95. 514p.

ISBN-0-684-80894-3 ¥4,210 (紙版)

(Simon & Schuster, USA)